

令和2年度滋賀短期大学卒業式式辞

卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。

画像でご覧いただいている保護者や家族の皆さまも、さぞお喜びのことと存じます。本当におめでとうございます。式典での晴れ姿を直接お見せできなくて申し訳ありませんがお許しください。また本日、このような状況にもかかわらず、式典にご臨席いただいている学校法人純美禮学園の皆さま、同窓会、後援会の皆さま、多数のご来賓の方々にもあつく御礼申し上げます。

昨年は今頃は、きっと次の年には普通に式典もできるだろうと思っていましたが、感染拡大が思いがけず大規模になり、世界的パンデミックになってしまい、まだ本当に正常に戻るのがいつになるか見通しのない状態のままです。皆さんはこんな時に卒業式を迎えるのは不幸だと思っているかもしれません。しかしこのような形で卒業式が行われても、皆さんの卒業の価値は少しも変わりません。この2年間、よく勉強し、充実した学園生活をおくって、いまここに短期大学士という学位をもって卒業できること、もう一度、心からおめでとうと言わせていただきます。

幸いにも今年の卒業生の皆さんの中にはコロナウィルスに感染した人はありませんでした。しかし家族や近しい人の中に感染した人や、中には亡くなられた方もあるかもしれません。そのの方々には心からお見舞い申し上げます。

滋賀県で感染した人は今のところ2500人余りです。単純に人口あたりにすれば500人に1人くらいの感染ということになります。したがって本学だと2学年あわせて1人の感染者があっても不思議ではないということになります。これからも一定数の感染者がでるでしょうが、ワクチンも近日中に整備されるでしょうし、免疫も広がるでしょうから、早晚、感染に対する警戒も軽減されることと思います。

しかしこの一年間、突然あらわれたウィルスによる感染症は、本当に思いがけない災難として私たちを襲いました。思いがけない災難といえば、ちょうど10

年前の3月11日、東日本大震災がありました。去年もまた福島県で大きな地震がありました。自然の猛威による災害は予想もできませんし、その被害を受けた人々にとっては理不尽としかいいようがありません。

単純な比較はできませんが、現時点で日本において新型コロナウイルス感染で亡くなったといわれている人は8300人くらいですが、東日本大震災での犠牲者は、行方不明者を入れると1万8千人を越えます。東日本大震災の場合は、地震津波の被害だけでなく、福島原発の崩壊による地域への被害を入れると、社会全体に対する非常に深刻な影響がいまだに続いています。

私たちは高度に発達した現代技術社会に暮らしていたはずですが、地震や津波という自然の猛威の前に、あまりに無力であることを思い知らされました。そしていまこの新型コロナウイルスという生物とも無生物ともいえないもっとも原始的な存在に、どうすることもできず私たちは振り回されています。

10年前の大震災の時のことですが、宮城県気仙沼市の階上（はしかみ）中学校は、津波の10日後の3月22日に卒業式を行いました。57人卒業するはずだった3年生のうち3人が出席できませんでした。この卒業式で、卒業生代表として梶原裕太君が読んだ答辞があります。今年の卒業式でも紹介したのですが、今年も敢えて紹介します。今年のほうがより実感がこもると思うからです。この卒業式は地震のあった日から10日しかたっていない。それでも梶原君はこう言います。

「・・・自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。つらくて、悔しくてたまりません。時計の針は2時46分を指したままです。でも時は確実に流れています。生かされたものとして、顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。命の重さを知るには大きすぎる代償でした。しかし、苦況にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。私たちは今、それぞれの新しい人生の一步を踏み出します。どこにいても、何をしようとも、この地で、階上（はしかみ）中学校で、仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます・・・」

天を恨まず、運命に耐え・・・なんとけなげな言葉でしょうか。この答辞を読んだ梶原君は、その後高等専門学校へ進み、防災関係の仕事をしているそうですが、かれはこの試練を乗り越えて自分の生きる道を見つけたといえるでしょう。

このコロナ禍の時代においても、理不尽な思いをしている人がたくさんいると思います。地震津波のような物理的な力による被害ではなく、たとえば仕事がなくなることによる経済的な危機など、社会生活に対する被害が大きく広がっています。日本だけではありませんが、若い人たち、とくに女性の自殺が増えているといわれています。

またコロナに感染することに過剰な危機意識をもち、コロナに感染した人をまるで犯罪者のように扱う、いわゆる自粛警察とか、地域の中で感染者が出たら村八分にして引っ越しを余儀なくさせるとか、どう考えても異常な社会意識が広がっているように見えてしかたありません。自分の命を大切に思うなら、人の命にも思いを寄せなければいけないのではないのでしょうか。

地震や津波で家や町が壊されるように、コロナによって人々どうしの心の堤防やつながりを維持するきずなが破壊されているのではないのでしょうか。いま感染を予防するためにソーシャルディスタンスということが言われます。確かに現在は、感染予防のため一定の距離をとって三密を避けたりするのは当然です。しかしこれはあくまでウィルスが蔓延している状態に対する非常の措置であって、これが普通であるような社会にはいけないでしょう。

学校での教育についていえば、私は教育という仕事は、敢えて言えば、密な人間関係があってはじめて成立するものだと思います。（それは人を育てること全般に言えることでしょうか）人と人が向き合うことから教育は始まります。キャンパスに来なくても、友達とのつきあいがなくても、オンラインだけで教育ができるのでしょうか。オンラインのすぐれた点はもちろんありますし、それが今回のことでよくわかりました。しかしそれは人間どうしの触れ合いによる教育に替わるものではありません。私は、このコロナウィルスの感染が収まった段階で、この間の経験を活かして、教育におけるきずなの復興と再構築を行わなければならないのではないかと思っています。

卒業生の皆さんもコロナ禍に負けることなく、新しく社会人として出発し、新しい豊かな触れ合いやきずなにあふれた仲間たちとの人間関係を作り出してください。

最後になりましたが、今年度の卒業生の中には、障害をもちながら毎日一生懸命大学に通い、資格も取って立派に卒業する人がいます。また社会人として再度学びの場に入り、きわめて優秀な成績で卒業する人たちもいます。そして遠い海外から来た留学生の人たちも、晴れて卒業を迎えています。これらの人たちは滋賀短期大学という学びの場を十二分に活用してくれました。この人たちは、普通に高校を卒業してすぐに入学してきた若い人にとってよい模範になってくれました。これは今年の卒業生全員が素晴らしい経験をしたとあっていいと思います。そのことを私はとてもうれしく思いますし、滋賀短期大学にとっても誇りとするべきものです。

2年間という短い間でしたが、これからも滋賀短期大学という場とそこですごした時間が、皆さんにとってかけがえのないものとして残っていくことを願って私の式辞といたします。

令和3年3月15日

滋賀短期大学

学 長 秋山元秀